

## 第四章 災害

本町の災害は、風水害が大部分を占めている。人畜の死傷・道路・橋梁・家屋の浸水流失、田畑作物の損傷は毎年のように繰返されるだけに、積算すると甚大なものとなる。

夏秋の頃、本県に襲来する台風は、台風銀座とあだなされる土佐沖から紀淡海峡を通る進路に、最も著るしい進行方向を示し、暴風雨とそれに伴う洪水は吉野川の氾濫を来たし、記録がないので明細には判らぬが、大害があったと見てよい。住宅を、少しでも高い所に構えようとした努力のあとは、盛り土の上に設けられた今に残る屋敷に認められる。

阿波志に記された著るしい大水のあとだけでも八回を数えるが、その他、阿府志・蜂須賀家記・阿淡年表秘録等を見ると、ほとんど連年のように洪水に見舞われており、天明二年（一七八二）には「土佐木材流送事件」が起って以後六〇年間も係争を起こし、寛政四年（一七九一）の洪水被害が大きかったので、秋祭礼を中止したこともあった。

阿波志が編集された文化一二年以後も、度々洪水に見舞われ、その度びに受けた被害は甚大であったが、特に天保八年の洪水、同一四年（一八四三）「七夕水」とよんだ）、嘉永二年（一八四九）酉年の大水）、嘉永五年（一八五二）子の大水）安政三年（一八五六一八月一日であったから八朔水といった。）等は格別の洪水で、人々は膽をつぶしたと伝える。弘化三年の洪水に牛島の堤防が五か所で切れ、家屋十戸が流失したことは左の日記に記されている。

## 吉野川洪水記録

(高原 元木家日記)

弘化三丙午年

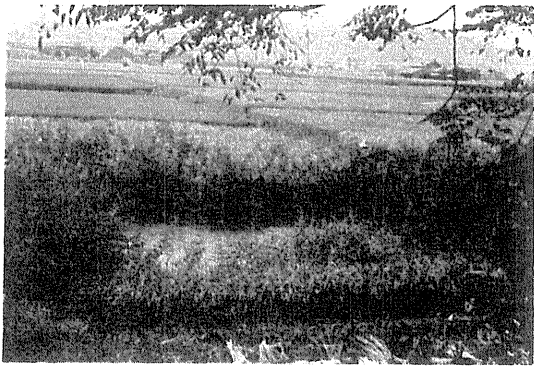
一 七月朔日より日々雨降続き候処、始終風も有之候処、七日北風ニ而中吹ニ相成候、八日より兎角雨降東風吹、九日中風夜分出水、夜半比、北土手八九合切戸辺ニ而ハ土手一緒、然所関口堤式所切、牛ノ嶋五所切申候、右ニ付南筋一円俄ニ大水ニ相成、寝せ藍等水入諸式水入ニ相成申候、関口式軒家流、牛ノ嶋十軒程家流、潰家并大疼式拾軒程、田地堀流、又ハ砂入広大之大疼ニ而候、川田村光玉ト申玉師寝床三間梁ニ式間式間下附右寝床ニ六床寝せ候処、堤切口ニ而地ばんより崩れ倒れ申候ニ付寝藍不残流、二階ニ藍俵積置候処、四十俵程流申候、國中一ばんの大損ニ而御座候、川田分も外ハ格別いたみも無之候趣(中略) 手元水之義もさし水ニ而、居宅地ばん石際迄参申候

先年安房水(阿呆水)ト相唱候四十三年以前、子年切戸堤切申候節之水より土手外トニ而式寸高く候趣(下略)

慶応二年(一八六六)寅年の大水) 八月一日より、七日まで、昼夜を分かたず降り続けた大雨は、遂に七日夕未曾有の大水となつて、ところどころの堤防は決壊した。特に夜間の大氾濫であつたから、手のつけようもなく各郡ともに大被害を受けて人畜の死傷甚だしく、良田變じて砂磧となり、秋の穫入れを失つた上に、貨幣の変動が加わり、人々の困難その極に達したといわれ、今に至るまで「寅の大水」として人心を寒からしめている。本町附近では、阿波郡日開谷川左岸の堤防破壊して、付近の田畑は磧となり、藤太夫須賀は一面の浸水となり、北の阿讃山脈から南の四国山地まで、一帯に濁水で満ち溢れたという。

明治時代に入つても、洪水の襲来は相かわらずで、殊に明治一七年八月二六日(陰曆七月五日)の暴風雨は、

江川のごときも、ふくれ上つた吉野川の濁水で区別できなくなり、名西郡高原西小学校も流失した程で、農作物は大被害を受け、米麦の価は高騰して人々は大変困窮した。続いて明治二年(一八八八)七月二一日の吉野川大洪水は、その曲流部に当る藍畑西寛円・板野郡西条・阿波郡知恵島において堤防を決壊せしめ、死者二六名、流失家屋一八八戸・田畑四〇〇町歩の被害を受け、明治一九年以來着手していた吉野川改修工事を中止せしめた程であつた。



池の決壊跡天神提牛島洪水の跡 明治32年陰曆6月1日

この災害にも増して甚大な水災は明治三二年(一八九九)七月九日の洪水である。本町現存の人々の語るところによると、八日・九日連日の暴風雨があり、(県西地方では「銅山川流れ」と呼ぶ猛烈な洪水)下流に及んで、広い範囲に被害を及ぼした。本町牛島の堤防も決壊して江川が吉野川の本流となり、渦巻く濁流は破堤部から石井町に向けて押寄せ、浦庄・高原・高川原等が一面に泥海のようになった。人々のよじのぼつた大木が根こそぎになり、牛馬の流されるもの数を知らず、人々は生きた氣持がしなかつたという。その時、濁流の流れた跡が沼となって牛の島西覚寺東に残り、当時の惨状を記念している。東京より片岡待従が来県して水害状況を視察されたのもこの時である。

これら水害の対策として種々の方法が試みられたが、最も古いと見られるのは、宝曆六年の洪水を受けて苦しんだ牛島付近の人々の難儀を見て、稲垣監物が「監物堤」と呼ぶ乗越堤を造つたことであり、明治一九

年以降、一二年計画で、工費九五万円を投じて吉野川堤防の改修工事に取りかかったのもそれであるが、工事進行中の明治二十二年、所々破堤して関係村民の憤激を買い、工事は一時中止されたこと前述のとおりである。

しかし、洪水は連年に亘って襲来し、被害額は年々増加する一方であった。

明治三〇年、三十一年、三十二年、三十五年、三十七年、四〇年と相次ぐ災害に、内務省土木局監督の下に、工事費九三万円を以て吉野川改修工事が着手せられた。この時の計画に善入寺島全域が河川敷となつて、その島の住民は他の地域に移住した。この改修工事の完成は、昭和二年に至つて漸く成就し、町民の洪水から受ける脅威を防ぐことができるようになった。

しかし、この間の暴風雨、水位の増大は、依然として殆んど毎年のように繰返された。明治四四年（一九一一年）の「土佐水」といわれるもの、大正元年の洪水、大正七年（一九一八）の大水、昭和三年（一九二八）同六年（一九三一）昭和九年室戸台風（一九三四）或いは、終戦直後の昭和二〇年九月一七日には吉野川洪水があり、続いてその翌年（二十一年）一二日二日一、二日二日一に南海大地震があつて、戦後の混乱で物資の不足と栄養失調で弱り、きつた県民町民に、加えられた傷手は最も甚しかった。

昭和二十四年六月一九日にはデラ台風、同二十五年九月三日のジェーン台風、二六年のケイト台風・ルース台風、昭和二十七年六月二三日のダイナ台風、二九年のグレイス台風と連続的な大台風に見舞われ、吉野川、江川の増水は町民に大きな不安を与えたが、吉野川堤防の完成によつて破堤の場所もなく、損害も軽少となつた。

しかるに昭和三十六年九月一六日（一九六一）には超大型の第一八号台風（これを第二室戸台風という。その進路・風力・被害状況が昭和九年九月の室戸台風によく似ていたからである。）があり、続いて一〇月二六日一二七日には、低気圧による集中豪雨があつて、町内東北部では、刈取つた稲束の流失、水田冠水による被害が大き

かった。本町内での被害として報告されたものは、全壊一四戸、半壊一七戸、床上浸水一四六戸、床下浸水一、二二四戸、他に非住宅の被害四〇戸があつた。

洪水対策として、明治三〇年（一八九七）頃から、町内各地区には、いわゆる「若連」によつて、水害防止組合が結成されて、各々活動していたが、昭和二十四年（一九四九）六月以来、「水防法」によつて水防団が結成された。これが強力な組織となつて、水防計画により、基本的組織を固め、吉野川流域の地区分担を明らかにして各地を担当してその実を挙げている。（昭和三四年度における県下重要水防区域は、一三二、三七km、その内、吉野川水系流域は九七、三km）

その他、災害として挙げられるものに、旱害・火災・交通事故がある。

本町内には、幸に地二り地区は見当らないが、吉野川沖積平野の上に立地しているので、旱魃の被害は少ないと思われるけれども、実際について調べてみると、史書には阿波国に旱害虫害が多かつたように記録されている。それは、洪水の難を避けるために、昔の住居が比較的高いところを選んで建てられたから、水害の記録は比較的古代に少ない代りに、旱魃の害が多かつたのであらうと考えられ、本町においてもその例に洩れず、中世以前の山麓に立地していた頃は、旱害に苦しんだことと想像されるのである。しかも、交通不便であつた古代中世の頃には、そのために饑饉となつて餓死する者もあつたはずで、地震・蝗害等とともに患疫の流行もあつて、朝廷から賑恤を加えられたこともしばしばであつた。

大武天皇 白鳳一二年 土佐沖大地震、土佐の田一三平方km海となる。本町の記録はないが恐らくは相当の影響があつたと考えられる。

文武天皇 大宝二年九月 阿波国飢え、使を遣して存恤せしむ（続日本紀）

〃 慶雲元年四月 阿波国苗損ず、賑恤を加う。(統日本紀)

聖武天皇 天平五年三月 甚しき旱に遭い、五穀登らず、大税を借貸して百姓の産業を続けしむ。(統日本紀)

〃 天平宝字七年 南海道の諸国旱す。七月備前・阿波二国飢え之を賑給し、続いて八月阿波・讃岐両

国の飢民に賑給せしむ。(統日本紀)

称徳天皇 天平神護元年七月 阿波国飢え、之を賑給す。(統紀)

桓武天皇 延暦九年四月、備前・阿波二国飢ゆ。之を賑給す。(統日本紀)

嵯峨天皇 弘仁四年七月、美濃・阿波两国飢病を言上す。百姓賑給(類聚国史。)

この他「類聚国史」「台記」「大日本史」「阿波志」等に阿波国の飢えたことが散見するが、その多くが旱によるもので、洪水の記録によるものはない。

阿波国に大水の記録がはじめて見られるのは天正一〇年(一五八二)土佐長曾我部の軍勢が勝瑞城を攻開した時、中富川付近の大水が城を攻めた土佐軍をあわてさせたという。「南海通記卷十五」の記載が始めてで、以後吉野川の洪水が流域住民を悩ましたようになっていくが、これは吉野川の洪水がそれまで無かったと考えるべきでなく、洪水は毎年のように、梅雨のとき、夏秋の頃の台風シーズンに繰返えされたのである。われわれ祖先の住居が山麓にあって、洪水の影響が少なかったので記録に残らなかったと理解すべきである。

後村上天皇 正平一六年六月二四日

北海道大地震、阿波雪湊在家一千七百余悉く津浪の引汐に連れて海底に沈み、鳴門の潮潤る。

正親町天皇 天正一〇年九月五日

吉野川大水、勝瑞攻開軍周章す。

〃 慶長九年二月一六日

北海道大地震

後水尾天皇 元和五年(一六一九)

凶作、疫疾流行

〃 寛永九年(一六三二)

阿波国大旱、有司に命じて窮民をめぐみ救う。(蜂須賀家記)

靈元天皇 天和二年―同三年(一六八二―一六八三)

大饑饉 三年四月干害、水害。

〃 貞享四年九月九日

吉野川大水、不を傷う。(蜂須賀家記)

東山天皇 元和一四年八月一七日

阿波・淡路大雨洪水、舞中島全戸流失

〃 宝永四年一〇月四日

紀州沖大地震、日本古来最大の地震といい、死傷多し。士民を救恤す。

中御門天皇 享保七年六月―八月(一七二二)

屢々大雨、不(稻)を傷け、人家の漂うもの四三〇余。

〃 享保一三年九月一日(一七二八)

阿波国大水、稲作被害多し

〃 享保一七年（一七三二）

大蝗（ツマガロヨコバイ）禾を害す。西国・中国・四国大饑饉、之れ近世に於ける三大饑饉の一つという。「日本災異志」所載の草間伊助筆記によれば、「今年正月より六七月迄は、風雨時に従い（順調で）五穀共豊熟に見え、無難に有之候処、七八月に至り西国・九州・中国筋すべて稲虫一時に生じ、次第次第に五畿内迄も移り、此虫、後には大に相成り、こがね虫の如くにて悉く稲を喰い枯らし申し候、一夜の中に数万石の稲を喰い、田畑夥しく損亡有之、士民飢渴に及び、西国筋より五畿内大坂あたり迄、道路に倒れ候者数知れず米価追々高値に相成り、犬迄も病みつき、人民に嘔みつき、人損じも多」とある。麻植郡特に本町内でも困苦したことが推察される。

桃園天皇 宝暦六年九月（一七五六）

暴風雨、禾を傷く。此頃連年凶作、上下困弊す。翌七年正月国中に令して奢侈を痛禁、努めて節儉に従う。宝暦十年に至り、藩主蜂須賀重喜（俗に大谷さん）水旱に備え、諸郡に「倉」を造り、年々米粟を貯え廿五万石に至りて新しきと易う。

後桜町天皇 明和二年六月（一七六五）

暴雨、稼を傷つく、八月又霖雨（長雨）。水潦、阿波国用支えず、金を幕府に請いて允されず。

後桃園天皇 安永元年（一七七二）

夏大水、秋又風雨、阿波国内連歉（連年穀物実らず、食満たず）用度給せず、三年を限り藩士の俸禄半を收む。

（狂歌）年号は安し永しと代れども、諸物高直、今に迷惑（明和九）

仁孝天皇 天保八年四月（一八三七）

前年夏秋の交より霖雨稼を傷め穀価騰す、庶民食物なく草根を掘り木実を求めて生命を支う。餓死者多し、藩主救助麦、銀札を出し救助に努む。本町には残存していないが、鳴門市里浦支所には、この年の記録「飢人救助米出候名面附帳」があり、当時の庶民困厄の状を残している。（この年二月には大阪で大塩平八郎の乱が起った。）

孝明天皇 嘉永六年五月―八月（一八五三）

九〇日の間降雨なく、田畑の收穫減少して種子に事欠ぐに至る。

〃 嘉永七年十一月四日午前九時頃

大地震、五日夜明けまで五・六度に及び、午前三時頃、殊の他大震、五日八時頃又大震、一二月にも強震あり人々何れも竹藪の中などに小屋掛して避難、之を南海の大地震といい、震源地は潮岬沖より室戸岬沖にかけてのところが伝えられ、南海道一帯に大被害を与えたので、年号を嘉永より安政と改めた。「阿波国内で人家の倒壊したもの二千余戸」と伝える。

本町の立地が、洪水のくり返しによって形成された沖積平野の上にあるから、大なり小なり洪水の被害のあるのは自然の姿ともいふべきで、梅雨あけの梅雨前線にともなう豪雨や、夏秋の頃の台風襲来による大雨の被害が圧倒的に多いことがわかる。

しかし、近世になって、集落が低いところへ拡がってくると、吉野川の洪水に苦難を繰り返えしつつも、肥沃土の推積による農耕の利便のため、再びもとの土地を耕作することを繰返えし、改修工事の完成で、ようやく安定したのである。火災もまた、近來消防組織と訓練が行届いたことと、機械器具の充実増加によって被害は激減